

山岳部々報

雑誌名	龍南
巻	1 9 8
ページ	6 8 - 7 1
発行年	1926-07-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/8863

踏破の實狀を映寫し十時すぎ散會。

野球リーグ戦優勝 三十一日醫大グラウンドに示威運動をなしつゝ我軍入場、高橋投手の怪腕迸りてノーヒットノーランの記録を作り五A對〇を以てこれを破り、かくてリーグ戦は我軍三戰三勝して遂に覇を唱ゆ。

六 月

暗雲消の協定成立す 先に交渉不調の對七高戰協定は四日突然七高側幹部來熊し午後本館にて双方幹部折衝の結果、野球は七月十二日陸上競技は七月十四日と決定した尙ほ雨天等のため延期する場合は從來の四日間と改むる事になり野球は審判を東清水高木兩氏を招聘する事以下細日協定せしも陸上競技は應援に大鼓を廢しすに決し更に七高側例年の競技種目順序の變更を希望せしが不調にして后日交渉再開となる。問題されどの難關は既に突破し、暗雲は消に去つた。野球九學に惜敗す 對九學野球練習は五日武夫原にて五高先攻にて開始、九學五對四にて本校を破り觀集を熱狂せしめた我々は勝利は掌中にあり、問題は九學の肉迫がどの程度迄かと思つてゐたのに、かくも不覺の敗をとつたのは實に遺憾である。試合後、木下先輩の聲涙共に下る激勵演説があつた。

劍道部優勝す 在熊四高等專門學校劍道リーグ戦は六七兩日に涉り武徳殿(北畠並びに武徳會)に舉行されしが、我軍は第一日に高工を不戰四人を残して破り、翌第二日は、藥專を戰士半数を以て屠り、醫豫を藤原吉田の大副將を餘して勝ち、榮捷を得た。(文藝部委員記す)

□□ 山 岳 部 々 報 □□

本學年委員

理三甲三 桑島直樹

理三乙 谷基吉

三月の初め春休みの計畫を發表して結局左の諸班を得た。

第一班 久住山より別府

第二班 祖母山より竹田

第三班 霧島行

第一班、第二班は十一日夕方水前寺を發し、宮地町北田正三氏宅に一泊させて頂いた、第三班は十日夜目的地に出發した數日の雨天を除ては他は晴であつた。

第一班旅行記 班員 文三甲一 平塚八郎

第二班旅行記

三月十二日快晴。午前八時十五分北田氏宅出發。宮地の町を出ると、根子岳の北麓をハコ石と云ふ箱形の石を目當てに進む。箱石の裏から道が分岐してゐる、右へ行く可きを、道が小さいので左へ、とつたが迷ひ始めて枯草の外輪山を右往左往して、やつと眞の道を發見。これで約一時間程の損失。道は霜解けして歩き難い、道は根子岳の東麓を南に走つてゐる

第二班旅行記

班員

文二	失	名
理三	乙	谷基吉
藤田	拓	
相賀	勇一	
古賀	一夫	
岡上	忠雄	
桑島	直樹	
栗本	先生	
西村	先生	
文	科	於保不二雄
理	科	會田強
〃		藪本秀

第三班旅行記

班員

文	科	於保不二雄
理	科	會田強
〃		藪本秀

十二時根子の東南麓と外輪山の接續點の高地に達す。中食。此處より小丘の波の様に起伏する一面の高原が見える、波野原といふ。この枯野の中に南方に大戸の森を見る、それを目標として十二時半出發。これより森迄は決して道を右にとらぬ事。右へとると、道は皆高森町へ下りてしまつてゐるから。一時十五分大戸森着。百姓屋二三軒、二時出發。再び枯野を東南へ。三時十五分峰宿、大畑分岐點の森に達す。暮る頃（阿蘇郡野尻村）津留の小學校に着く。夜野尻のN氏宅に泊る。終日枯野の旅行であつた。

十三日風雨。夜半より盛に降り始めた。山は全く霧に包まれてゐる、火鉢を圍んで一日暮した。

十四日。午前中、西風時々降る、寒くなる。山は四合目以上は相變らず霧に覆はる。十二時全所發、小學校迄來た。小學校に携帶の中食をとる。衛生講話を傍聽す、全夜全小學校に昨年新任されしS氏の下宿に泊めて頂く歡待された。夜星が見え出したが、西風と共に寒さは加はる。（以上古賀記す）十五日。山は次第に晴れて行く、西には阿蘇が、北には久住が輝かしい日の光に照されてゐる、八時出發

五ヶ所の道を採らずに、直ちに國境に當る西尾根に取りついた。（九時）視界が次第に廣まるにつれ、阿蘇、久住の高原が

或ひは風の海の様に見えてくる。尾根の傾斜は緩だが、霜柱が深いので、それを踏みつぶしながら一歩一歩と登つて行く、やがて雑木林に入つたので杖を切つて、更に丈の短い芝原や小笹の中を行く、行く事、寸時、漸て巨木と熊笹の密生してゐる所に突き込んだ、路は少しもついてゐない。一間離れた所は少しも見えない。所々に猪が草を敷き倒した圓形の空所がある。路がないから見當をつけて無茶苦茶に行く。空が段々曇つてくる、心細いこと一通りではない。倒れた老木の上を傳ひ、或ひは木の根にすがり、惡戰苦闘二時間、遂に藪を突破した。やれ一安心と思ふ間なく直ぐ頭の上で獵師が鐵砲を向けて待つてゐる。猪と間違ひられては一大事と、杖の先に手拭を結びつけ、伸び上つて、人だ／＼と怒鳴りながら振り廻す、正氣の沙汰である。その傾斜を上りきると、五ヶ所からの道と合した。これから先は往來も同じだ。展望が一時に開けたので井戸の中から飛び出た蛙の様な氣がした、頂上迄はもう二軒はない。空がすつかり曇つて、急に寒さが身にしみる。防寒具を着込んで、晝食をとつた。やがて再び林の中に入る。併し今度は笹がなく、おまけに立派な道がついてゐるので何の事はない、周りの草木は皆氷の衣を着てゐるのが何より珍らしい。八合から上は

雪が大分残つてゐた、頂上着二時。

遂に來た、頂上は數十坪の臺である。二つの小さい石の社がある。一つは宮崎縣ので、一つは大分縣のである。目を南方に向けると重疊たる日面の連峰が。西に向けば大鏡で一撫にされた様な高原の涯に、懐かしい蘇峰が柔かな煙を噴ひてゐる、そしてそれは威嚇的な根子の奇態と共に面白い對象を見せてゐる。更に右を向けば廣い、廣い緑の海の彼方、九州の雄久住は突兀高聳して他の群山を押へてゐる、併し淡い雪の衣をつけた紫紺色の久住は他面には親しい姿を見せてくれる更に右を望めば布團を重ねた様な雲の下に別府近傍の山々が見える、三百六十度の回轉を正に終へんとする時、局面全く一變、吾々は殆んど千米に近い絶壁を脚下に見出した。北に開いた馬蹄形をなし、本谷山、傾山の峰々が近づくべからざるものの様に聳ゑてゐる。吾々が落ち着いて展望をほしいままにしてゐた時、たちまちに起つた霧の爲に、展望はすつかりきかなくなつた。その瞬間、我身を忘れる様な氣がした、神來の機に觸れたのだ。ハット氣がつくと、雪がちら／＼降つてきた、山頭の長居は許されない、急いで下山の途についた。名残り惜しき祖母よ、お前に又何日會へるのか？ 險惡な天候は落ちついて足を運ぶのを防げる。飛ぶ様にして東北の

屋根に向つた。一軒足らず行くとは路は谷底目掛けて急に右折する、美しい美しい、森林猿滑りの野生樹を見られるのはここだ。奇麗な瀧が澤山ある。大方名前もないのだらう。一つを撰んで千壇の瀧と命名した。實に呑氣な旅である。五時谷底着、美しい古梅の一株今が丁度最盛りである。谷の日暮は早いものだ、もうあたりが薄暗くなりかけた溪流を越さればならぬのに橋がない、渡り場を求めて半時間、二ツ三ツ大きな石を見つけてやつと渡つた。

祖母は如何にと眺むれば、雪にすっかり覆はれてゐる。尾平鑛山に着いた時は暗かつた。その晩は鑛山の技師○氏の宅に厄介になつた。四百年も續いた鑛山は今ヒツソリして、只吠ふる様な風の音と、腹の底迄洗ひ流す様な流の音しか聞えない。時々犬の吠えるのが聞える。

十六日、晴、十時も間近いの、山にさへぎられて、ここには未だ日光は當らない。厚く御禮をのべて、氷つた道を竹田へと急ぐ。十一時土岩。十二時、上畑。午後一時半、小原着。ここ迄は長谷川谷である。山を越えて西北に向ふ新道を通つて行く。竹田發午後五時四十五分の汽車で犬養に行く。

(岡上君は都合で鐵路熊本へ) 犬養では小學校に泊つたが、校長様から極めて變手古な歓迎をされて氣持ちを損じた。

十七日晴。大野郡川登村泊にある鐘乳洞見物に行く(本年三月三日午後七時決死探險隊の發見に係るものと稱す) 猪や猿の骨が澤山あると云ふ新聞記事につられて行つたのだが大したものでもない。夜犬養で本校生徒後藤君の所で大層御馳走になつてから汽車で大分に行つた。大分で古賀君と別れて別府に行く。數日滞在の後、波立たぬ内海の景を賞しつつ紅丸で歸路についた。(桑島)

□□ 文藝部々報 □□

新入生の讀物調査、我が部に於ては新たに入學線を突破して

龍南に來つた新入生諸君の讀み物調査を入學直後に試みた。

愛讀書に於ては流石は漱石によつて知られた三四郎の本場に來る人だけに、夏目さんの「三四郎」及び同氏の著作が遙かに群を抜き、次に有嶋武郎高山樗牛同點にて、藤村や白村物が寛やロシヤ翻譯物と共に第三位を占めた。雜誌に於ては受験苦に惱まされてゐたためか英語研究が第一位を占め、續いて文藝春秋、文章俱樂部となりキングこれに次ぎ、中央公論、